

0 150 cm 10 20 30

SEKISUI JUSHI

543
シ
37

[Faint, illegible handwritten text, likely bleed-through from the reverse side.]



のつらふれふるゝ定家卿の愚秘抄の流
 哥よと五記のせしむるのありしと云ふも
 ひ頭並縁の字縁の詞をれ有尾親白誦を哥
 の流の長と人鷹赤人のと下八雲所抄より
 らまこつ万葉并は八代集の歌敷いつま
 とき誰に流と出されえぬすし歌のさ
 へは原大納言の新撰髓腦ありひし九歌の
 代集より歌十首こまは後多羽流の流り
 よりて定家卿のえひるり又兼えの流
 將軍家よりそと流り流るよりて後成卿
 ありしと云ふれよれそと云ふいとも八雲の
 中より大泉河帝北條新國の草草鳥獸生
 莫人倫衣食雜物并いしはそとの歌あり
 源氏の歌なりと云ふし一抄の流れとも
 の詞と記してありしと云ふ流補初たあり

和歌初草抄より萬葉之伏集後拾遺の歌の詞経考
大和やとお法ののされ詞も何れも奇なりよきこと
とてもて奇と出せり此のれ半八言なり
ゆつてこれのきなるも奇詞は終る詞と
や目念とてきりきり又詞の終る一とて
葉にのみきつてきりなりそきと八言と
とて奇と出せり此のれ半八言なり
ゆつてこれのきなるも奇詞は終る詞と
や目念とてきりきり又詞の終る一とて
葉にのみきつてきりなりそきと八言と
とて奇と出せり此のれ半八言なり

これ奇を著くゆかりの雲の志より尾り
ある一筋よりなり今葉と花奇ととも
けまのわさりのそおがらんもまの
ひのりともなふあねの秋の夜より月とあ
らまぬともは秋のそまをきりうま
をうりぬ一筋より一筋よりあねの
とんち一筋より一筋よりあねの
ひまの腹よりあらといひあねの
一筋より一筋よりあねの

授心秘要抄巻之上

和奇秘林抄上巻

春

立春

年月立春早き
小初月除附客

子月

若葉

白鳥節

霞

鶯

残雪

若草

錨り

毒

柳

東之海の人敵と凡侍臣等とも四方洋へ考ふ
や今の世は内裏仙回指冥太長なるものなり
事か来し扇獲白散四方洋故有年仲行
事く況記く

年のもよもいふはあつ年にまゝのまゝに
 いまの年と越ぬといふはまゝのまゝに
 月あつてなくともあつてもやゝあつても人
 の言ひきこひまゝにあらうあつてもまゝに
 まゝにあらうの月れつとあつてもまゝにあらうのま
 まにあらう

年乃由はきになりてせとまひやんといふ
 下せと限りあるらうはまのうれんま年とやま
 へきとひとやんを二音のうらふ年の字に
 わりさせやん限りくれらうあられの書
 古今集の毫改せり

年後
 年の月又まゝにやうけふ處へは殿のち
 うれなまゝとやう燈山のこみなり
 うりともみのりもさるゝなり

早まやふいそひまある事あはれき
必しもま之日とて次ぐ一つをぞい早
ましく初まといふなり一なり早ま初ま
又まま成順とて常の事なりままの歌もそ
早ま初まといふなり也くすまの正月一日より
限る一よま初まといふなりとみたり
の事あり

源若流

事あり
 左
 雪風よさうさやれひまとなきまはやまに初花
 雪風よさうさ氷のひりくさうつはなまのこ
 いちやとやあやとてふあやとてあやとて
 心なりはなはなを花とあやとてはなま
 本文とあやとて

早苗なりてまゆ橋葉とそよむ秋風のう
 風うよとまゆなりうはるのやうれたるま
 なたる初春をきやうとあやうかとつまん
 といへるさきへの一袖に片墨初原と水の名
 所なり

わがわがの若菜はえんとてあけぬふゆをきくも言ひつ
明日の恙をつむべきといふ所より世にきかぬや
ぬきれうととなすもあけぬふゆの必なり
^た
ふふ松のおなほ清くに於て世邊の王ふかにあり
こころいふまじき言ひよも内なる心は言ひえずに世
邊のまじき言ひもや空しく云々山の雲は松を
して眠るもの無くとされ和漢の流れなり
詩り満山松雲属誰人となり流るる水と
松の言ひもいふもや
旅人のなき海にふつむしの生園の小枝のける歌なり

[illegible]

ともかくもとじまとなりは、
 恒ともいなりぬる、
 水の車われや、
 水くまらぐれ

おききと云ふ成事とせり是は志介れ
に思ひ入りぬる所のまのこれにとくまき
又この世におほいしよあらば流石ななり
ぬる所のとはとてしてこそあつた流石
さへ、こゝろをたてては、やあるも此
万葉れきとありいてなり

後拾遺集

万葉に云とありして入り
 かた海の底なるをわたりて入目とあらふ其は後
 於古海の底の終りなりなるやと云ひ入りて日
 と仲つまゝ浪のあらふなり 野々原
 入目とあらふといふなり 以難き 腰のなり
 ひとはありと云ひ入りて 野々原
 けり云ふ抄あり 於古海 葉集 葉集

わづの風とあはれ

習とて衆の心をねてまはつとてたのひまは
 新日新の心とて衆の言むくは清くまの
 とてのまはれいまはくとなつ
 ありまめきにたりなり世のみきく衆とて衆とて
 ありありとまめきにたりなり世のみきく衆とて衆とて
 とてとてのまはれいまはくとなつ

當
もろろり
もはろ
おのちろも
初音
きみろ

若し此の書とて、
 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

海に雲の縁をたぐひてなほくさくさの煙
ふらふらと波をたぐひてなほくさくさの煙
まなまなと波をたぐひてなほくさくさの煙
あまのこ

あまのこ 雲の縁をたぐひてなほくさくさの煙
ふらふらと波をたぐひてなほくさくさの煙
まなまなと波をたぐひてなほくさくさの煙
あまのこ

あまのこ 雲の縁をたぐひてなほくさくさの煙
ふらふらと波をたぐひてなほくさくさの煙
まなまなと波をたぐひてなほくさくさの煙
あまのこ

あまのこ 雲の縁をたぐひてなほくさくさの煙
ふらふらと波をたぐひてなほくさくさの煙
まなまなと波をたぐひてなほくさくさの煙
あまのこ

頼朝とも頼朝とも云ふ孔子の言ふこと人
に中ふ才一なり孔子のいふことこの終
つるに代照知とてものごとく心ふやそ
とまはるるなり孔子の言ふことあり
頼朝曲曲まゝ国子監なりとて頼朝貪に
て事なり人のいふことあり
家なりといふことあり
真諦なり文なりといふことあり
世とも若く頼朝の貪なりといふこと

よわつとの酒なりと
草なり言明初布灌言明といふ言れと
なり言明なりといふことあり
とていふ言の事なりといふことあり
花山有馬蹄花山有馬蹄花山有馬蹄
花山有馬蹄花山有馬蹄花山有馬蹄

とていふ言の事なりといふことあり
花山有馬蹄花山有馬蹄花山有馬蹄
花山有馬蹄花山有馬蹄花山有馬蹄
花山有馬蹄花山有馬蹄花山有馬蹄
花山有馬蹄花山有馬蹄花山有馬蹄

とていふ言の事なりといふことあり
花山有馬蹄花山有馬蹄花山有馬蹄
花山有馬蹄花山有馬蹄花山有馬蹄
花山有馬蹄花山有馬蹄花山有馬蹄
花山有馬蹄花山有馬蹄花山有馬蹄

夢や美にぬけてゐる人と知りいふを
 己美と云ふよその美を柳糸一美

て美しきものなり

梅の花美紙よりひきぬきせりて お利

お利

[illegible]

毒花の父老もあつて、ふつと

うゑははんとてふしや此の爲と

うけとて世の爲と

秀よりゆはるるをきくといふこと
 なり心成るるなりとをきくといふこと

あきま

善教之字

梅歌今よりなるらんそのうへのききよき

現今さうになるものゝ多きは

概せしむるを以て其の善も其の惡も
してたのりて其の善も其の惡も

詩小
門賓搖謁王臣
刻夏國輝
孤芳還始

還松

春といふ回を

未臨

毒花^{どくわ}あまの^{あまの}印^{いん}あ^あ我^わ神^{しん}又^{また}白^{はく}の^の書^{しよ}る^ると^とあ^あう^うん

元

梅苑と折るるより、前々、後々、歌詠

梅苑と折るるより前々福之丞社

よめひとらせ敵はとんまゝに
あつてまゝかはん折むわあ
あつてまゝかはん折むわあ

とらへてきこふゆゑにあらはれぬ

看とてあてきまうあてあんのう
度あてあてうとあて

香のふりやうとて
 廣くふりやうとて

神童梅のうしろのふしで福あふふ家と

梅の如く白くして紅をうすく

日る社をけし杖のわがゆふひゆふと
かゝりて宿やとぬるとや社に

あゝいふ室やと形うとや被衣

ハ、
や根と切りてへるなり

や根と有りてうへなるなり

かこゆへしうき多しこめなる事なり
名とりとて入て梅とありう金てよめ

客とて入て梅をかりし金てよし

親哥なり

店記

いし年承うてふ一畝宛は恙事此梅は花咲けり
ち年根据ゆて栽一畝の恙事此

三年根拠ありて載し宿の差事也

梅の花の咲くころ

と海の浦やまに雪のふりて花の梅の枝の青
あふのうきと花の枝の青と梅の枝の青と
とくもあまの光の光とありし出でよめ
哥このめれあふの光と梅の枝の青と

梅の花の咲くころ

中系詩

梅の花の咲くころと梅の枝の青と梅の枝の青と
梅の枝の青と梅の枝の青と梅の枝の青と
の光とあまの光とありし出でよめ
あふのうきと花の枝の青と梅の枝の青と
らとあふのうきと花の枝の青と梅の枝の青と
とくもあまの光の光とありし出でよめ
心あふのうきと花の枝の青と梅の枝の青と
あられあふのうきと花の枝の青と梅の枝の青と
花の枝の青と梅の枝の青と梅の枝の青と

梅の花の咲くころ

西奥

梅の花の咲くころと梅の枝の青と梅の枝の青と
梅の枝の青と梅の枝の青と梅の枝の青と
とくもあまの光の光とありし出でよめ
あふのうきと花の枝の青と梅の枝の青と
らとあふのうきと花の枝の青と梅の枝の青と
とくもあまの光の光とありし出でよめ
心あふのうきと花の枝の青と梅の枝の青と
あられあふのうきと花の枝の青と梅の枝の青と
花の枝の青と梅の枝の青と梅の枝の青と

梅の花の咲くころ

西奥

梅の花の咲くころと梅の枝の青と梅の枝の青と
梅の枝の青と梅の枝の青と梅の枝の青と
とくもあまの光の光とありし出でよめ
あふのうきと花の枝の青と梅の枝の青と
らとあふのうきと花の枝の青と梅の枝の青と
とくもあまの光の光とありし出でよめ
心あふのうきと花の枝の青と梅の枝の青と
あられあふのうきと花の枝の青と梅の枝の青と
花の枝の青と梅の枝の青と梅の枝の青と

赤白の色海をれまはてしなくちやうと
 人情難弁といふ心とほけてこぬ人を
 おれ色夕日もありきれといふ運も弁
 へ走り切つてと云

冬はく柄をあらわしてふと紙あきよるしを
 まにうけうらてむより暖心とあらねひあ
 まれ雪のふしの花をそれともみあさうは
 といひ花をきよまゝうしてふとふとも
 うたふといひきうれふとふと花のうけを
 うまや梅といきてむらへきあとの心紙を奇
 の羽よりて免つてく流る

人麿

明より入て免つりく浪魚一
人磨
 梅枝を折るもみどふ方此のまきうろ寄れあてやまに
 雲うねくもり寄のちんてちしとて毒花は
 ゆひひておとしともらんとして色れまきこ
 きこやまはうと寄あしの花ふなり海

月をいづるもあはれなり
 あまのうらみはあはれなり
 万葉集
 あはれと云はれぬあまのうらみ
 概^{タリ}勢^セ合^{アヒ}ふもあはれなり
 月をいづるもあはれなり

おきし書いふつとくは歌麿のたれ又雪のう
らみひいさきうつとくはわまを音会若海
わまきし音会おきしあまを音会わよ
たり是程のうけ廻る心やわまきう
の清湯いづもくちとてぬれたる衣入
よりせこみせんとあひ梅花それとては雪の
よりせこみせんとあひいつる梅花　うき
のをめしむらんこと書いふにや　あま

又書之用也 定本鄧云

家
背子

歌子

夫妻同利

下板の座はなほともなひにねの玉座は海より
ともし道原のあそび髪よりよせていそぎ
風のきつとも柳の糸といひていじとほ家
さもつともさか娘のふたりめとひつ
よしは言は源氏と梅と一はえ折てともあり
氷ゆよせてふいえともあともさく下板は
りあやといふしろそいあは座はあつ枝のつ
蓮よりあつなり

遍照

古
漢綴糸よりあひて口病と玉をあふきうまふ柳の

春の柳より糸よりわけて白糸と
 むねにぬきききおとになつてあそびより
 ぐんとぐんとりれ柳の色ならし柳うねう
 ちやうと柳れきうれきうと糸よりいされ
 と春の柳の糸といへり

喜柳糸よりて芳にやうのうたをうたへ

柳のうへにさくらてきふはまねと
いづれのしらけりともなるらんや

若

主柳の糸よりさうききをもとめてさへて花のやうに
 柳の糸よりさうききをもとめてさへて花のやうに
 はらうひぬうとや糸のふさふさといふ
 何て花のやうにとつて

院法部

風声は柳の糸のやうなあひくよきてゐるさ
 柳のやうな柳の糸のやうなあひく
 一海まで半言で抱くとなら

這

中流のちたれはるる玉柳をま風のきつる威なり
 こがれのおちたれもの玉柳をま風の吹て
 なひくちせつうりあふととなり

美

尖の鹿の座のうとみうわけて柳のきよめ
 ずくの雲の座のうにふとくはくは家
 うあわけて柳のきりうちうとくは

習き半ばなり

雅治

白雲れ渡るにありき柳のついでに風を吹

きし雲のさしよと柳のついでに風を吹

風のちとよとてき柳のついでに風を吹

れあまふ山よりいつききききききき

の海方よりいつききききききききき

日雅

と懸蓋お座しききききききききき

乃の辺の柳も柳まふれしききききき

朽木の柳もまふれしききききききき

よといふくくくくくくくくくくくく

なり柳のついでに風を吹

流るる風情が見世なりききききき

白雲易しききききききききききき

なり半心りきききききききききき

ぬきやききききききききききき

源せきききききききききききき

愁宅遠眺庭月暗陸地遠目ありき

柳の枝と云ふ志の柳の枝と云ふ志

ぬききききききききききききき

くくくくくくくくくくくくくくく

陸恵の地の柳も柳のついでに風を吹

きききききききききききききき

載てみよき

漂心月夜交枝桂ありききききき

へ柳の枝と月夜の枝の枝と云ふ志

ん柳の枝と云ふ志の柳の枝と云ふ

きききききききききききききき

系と陶器の柳の柳の枝と云ふ志

くくくくくくくくくくくくくくく

ぬきききききききききききき

ぬきききききききききききき

生
春
風

性心秘要抄卷之下 和歌歌林抄上卷

春

早蕨 拾線 胡蝶 春雨 春雲
陽春 雛 雲雀 嘆子鳥 杏花
芝菜 三月 杏花 杜若 夜花
歎 河津 蹴鞠 暮雲

あり雲との見えてまゝやちりぬのうと
 花をうゝといふをくたの栞ときこゆゑ
 雲とちりてや風をねんとてり

[illegible]

花さなり

延序

白雲とて舞うはるも今世の古世の山乃花さうり
 かし世の山の花さうりいふと雲といふゆり
 又さうもさういふなり鴨長尾のさみぢは
 けな初うこめりおあけとめり清きう
 ろみさういふと海よりせり

初

永富の教をそむる人まじりて
 成とれ教をふらぬ人まじりて
 一々あふまきとなづりたる
 人教をそむる人まじり

第

世に絶て橋のさるをばまはしめしめけり
 この方浮世はたは諸端として多かり有る
 け方の世方れ橋よりちもいそいでと橋の
 世中と橋と云もの絶てちもいそいで
 いそいでありりやそとて世中ありて世

[illegible][illegible]

海よりとて来れば花よりとて

とて花は花に成るより花よりとて

花のさうりやあはれ世あはれ山のとて

花と花とさうりやあはれ山のとて

花と花のさうりやあはれ山のとて

花と花のさうりやあはれ山のとて

花と花のさうりやあはれ山のとて

花と花のさうりやあはれ山のとて

花と花のさうりやあはれ山のとて

花と花のさうりやあはれ山のとて

花と花のさうりやあはれ山のとて

花と花のさうりやあはれ山のとて

花と花のさうりやあはれ山のとて

花と花のさうりやあはれ山のとて

花と花のさうりやあはれ山のとて

海方ちきとよしおふよりめろと
 りりあは海方ちきと古く人を
 らあとならふ

同

まじりて我もいそぎぬまはらふを止るしづ
あむらとて花めといひくちりきり
このあやもきとなりておどろ新古今
よかりけきかた首もとくつらの一寄
小なりといふ文字万幸といふちりきり思
ふとして世の執着といひきり(三)
¹⁰君福きて我よりせうあらふはれともあれどん月
たつひさしてなれもなほは海のまへに
あめらうちりはれともあら月のこゝろ
いづつゆのひのかちりきりかき月と
はんにけりちりは蓋おるの美事なる
とわめたりなるはれりちりきり月と

又と海にまて寝ともあきまたを
りてきねしうきなり
逢見人ぬき便入糸端きつ族と親疎
うた人の面をうろく又たの嘆白へうろく
きつてきつてきつてきつてきつて
きつてきつてきつてきつてきつて
ひつとよ

織自何糸唯言兩裁之定換は玄風
花の端と織糸を多くするの裁り
定まりたるを換へて玄風は海とせ
よ

始ニ識シテ去風棧上巧ヲ惟織也ヲ織芳芳
今始てよりいふ去の風の棧の上れ巧ふ
糸の活と織うと成さる色といふ
くそののこゝろに芳芳として綴きぬ

わたりかきりなりあはれはよし好道なりんえ
好りき車れ機りしものより又いけりやも
りあがりへ—八重よな子日世馬者好摩や
成実統細慶島のいさよえてあつこい
しわろき系又いけりやまわつてま
る—勝つるものお
慶と好りきものいさよえてあつこい
あつてはしきものいさよえてあつこい
よわろき系又いけりやまわつてま
はあめりしれはあつこい
いさよえてあつこい
まのこれにふりしはあつこい
まのこれにふりしはあつこい
いさよえてあつこい

有るよあつこい

好車芳菲お綿地世線線礼名羅天 島錫

まの世れまゐりき非とあつこい
お綿とて好りき—いけりやまわつてま
ゆのこれにふりしはあつこい

希野屋敷お綿結常天世織造羅維 島

好りき車れ機りしものより又いけりやも
りあがりへ—八重よな子日世馬者好摩や
成実統細慶島のいさよえてあつこい
しわろき系又いけりやまわつてま
る—勝つるものお
慶と好りきものいさよえてあつこい
あつてはしきものいさよえてあつこい
よわろき系又いけりやまわつてま
はあめりしれはあつこい
いさよえてあつこい
まのこれにふりしはあつこい
まのこれにふりしはあつこい
いさよえてあつこい

よめ

船とせしる言はゆきて上海の上げれ船は
 是の源氏も海へかうされ船は後より舟
 のりは時驛船はとく敵と人の田舎とる
 れ時りそととる船はとく敵と人の田舎とる
 船とせしる言はゆきて上海の上げれ船は
 是の源氏も海へかうされ船は後より舟
 のりは時驛船はとく敵と人の田舎とる
 れ時りそととる船はとく敵と人の田舎とる

[illegible][illegible]

二月廿日 枕元

春のひのけの曲水の宴の事なりとありとあり
うしろのあはれも御幸なりとありとありとあり
ありとありとありとありとありとありとありとあり
けしきありとありとありとありとありとありとあり
いふことありとありとありとありとありとありとあり
乃めなりとありとありとありとありとありとありとあり
有りありとありとありとありとありとありとありとあり
歌はありとありとありとありとありとありとありとあり
つとありとありとありとありとありとありとありとあり
ゆらんなりとありとありとありとありとありとありとあり
西とありとありとありとありとありとありとありとあり
ふ年とありとありとありとありとありとありとありとあり
れとありとありとありとありとありとありとありとあり
みとありとありとありとありとありとありとありとあり

春のひのけの曲水の宴の事なりとありとあり
うしろのあはれも御幸なりとありとありとあり
ありとありとありとありとありとありとありとあり
けしきありとありとありとありとありとありとあり
いふことありとありとありとありとありとありとあり
乃めなりとありとありとありとありとありとありとあり
有りありとありとありとありとありとありとありとあり
歌はありとありとありとありとありとありとありとあり
つとありとありとありとありとありとありとありとあり
ゆらんなりとありとありとありとありとありとありとあり
西とありとありとありとありとありとありとありとあり
ふ年とありとありとありとありとありとありとありとあり
れとありとありとありとありとありとありとありとあり
みとありとありとありとありとありとありとありとあり

春の書月とありとありとありとありとありとありとあり

まれ言月ならし月れ之初の二日なりと云碑
 小菰と云枇杷の二を又映してありと云
 と云菰と云くさくさといふ二月二日の法師
 海と云のむ日あればと云ていふ
 旅心車心竊待幸院遍さ平天途 荻雅親
 二月二日の曲水宴と云ていふ
 くらと云るも出づ水は又と云ていふて詩人
 けふあといひてて雲の影にありと云ていふ
 あり時詩と云はけり然る人々又云ていふ
 て酒とのさるると云ていふえと云ていふ
 と云と云るもはははと云ていふと云ていふ
 まくまといふと云ていふと云ていふと云ていふ
 そと云と云といふと云ていふと云ていふと云
 のちと云と云といふと云ていふと云ていふと云
 りと云と云といふと云ていふと云ていふと云

已あさりさる半あり低くの何れ
 低山より出づ河よりと云源ありと云て
 遊鶴也と云ていふて淡波万頃船より
 あとと云と云といふと云ていふと云ていふと云
 始遊鶴入我即之座と云
 夜毎偷濕る波と眼彩媚曉風緩吹と云云

紀納言作なり萩のぬれと云ていふと云ていふ
 枇杷のほつと云と云と云と云と云と云と云
 有波と云義人れ眼の媚ふと云と云と云と云
 の風好く吹てと云といふと云と云と云と云
 印と云と云といふと云と云と云と云と云と云
 らくはと云と云と云と云と云と云と云と云
 杜若のさるさるか卯と云は花に也 創心
 いと云と云と云と云と云と云と云と云

澤邊にやうのふれ海より又鳴頭なるか
きつゝこゝといふふはなを臨みてせよ
きりうきも水とて海へとむり
宿のせつこゝろもまた海とてけり
ゆきもむしあふとけりけり
とるも八河とてけり
あちをむし

いふは昔の宿のおれつとて色えりやせめ
いそぎえてありむの宿のい
よわたりこれとめはさるの色えり
かきふのとりきと宿の塩りよ
そよわたりき氷邊はわきと宿の塩
よせたり此方後撰交部よりい
ふまのわかれとまにさるき
うりゆわかれとまのまにさる

[illegible][illegible]

お客のよとに病治しとてゆくと思ひ給非えと
 志すにあらなくお知りて内倉すはけあやう
 川のけて非えとてうもとれうひとて給こ
 のひあきとてう——と思ひてある義の孫えは
 雲井の局もとうとやと悲ひやうにある給
 しとての夕雲をうとてい——せんか
 く思ひて夕雲

く世をて々々
と義仲又雲のなほをいふやうに物なるまじはま
しうと云ふ
とよりいふやうに止むるに止ぬと云ふなるし人p
昨更とていふなるの非をいふp
と云ふ
よか澤さうなふ沢池といひさうなふふ
しうと云ふのへい澤さうなふ沢池といひ
と云ふと云ふのへい澤さうなふ沢池といひ
と云ふと云ふのへい澤さうなふ沢池といひ
と云ふと云ふのへい澤さうなふ沢池といひ
と云ふと云ふのへい澤さうなふ沢池といひ

新古
めをわり考なると

琴

縁なり松より出ればなれとのつとそ花の香
 みよりなれ松のけけなれともあう
 ひとと花の香とや

好味福記

漢の
ありともいふ色もわづかの松久又著をたきこれなる國光
ゆつたりといふれ色もあらずぬ松より夏の
咲く走りしゆてわれとならむ

竹崎晴江

たの浦に産みぬる者ありて世にあら
そこのしれとくもあふ友ありとく
れともあふむして抱くはまわらば多松橋
翠田新浦暖い

雅縁

雅緣

其の初より終まで一神のなりやむるを
ひそひの初よりの終までの著る神
のふところなり

帳中^ス慈恩^ニ三月盡^{又ハ三月ノ}忠告^ル於^ニ前^ニ馬^ヲ開^ク也^{タリ}

日
 えれやうしき言ひりあつとて
 おともえの花園まればたけいとんきのな
 きよきそへゆふよりいさくは花園まれば
 まるもきのふとて成すもふとひくへ
 きとや

まのこゝろを思ふにやうきものやうな顔の張る
ふくやうやうきとあつた何いめをきく
事やうやうな顔のうけうにねえお
くわうとものけとえいさうなり
まのこゝろを思ふにやうきものやうな
うけうなり

花をなまめり霜きゆき雪の無とにたまりぬれ
むじしとくもらうめらやといきふてゆき
のありさといはるまでぬさひしきとちり
花より人のつとひるる時をよれ泣きぬ

[illegible]

美のけしきと出ぬ
 ふるまれ来りけしきと出ぬ
 しあはれの美と出ぬ
 とと奇しくなりて
 後必

抑も此の神と云ふて志あると云ふやうに
 心はの言の神と云ふて志あるやうに
 心ぬこと心と云ふて志あるやうに
 心をたう心と云ふて志あるやうに
 心と云ふやうに事あるやうに
 心をたう心と云ふて志あるやうに

[illegible]

な
いり
又と何ぞと思へばまゝに親をよ—わいのあはれ
まゐらん何と思へばまゝのまゝであらうかたき
はおもひまゝであつても此等のことより
おそろむてゐる—まゝ年よらん所より
よくとわりと教めよう

人生更^ニ少^シ時^ト頃^ニ惜^ム年^ヲ不^レ常^ニ春^ノ酒^ヲ莫^ク宜^シ也^{ナリ}

人さめりてあき事あれは時のうつら
りとあひむくは事や年はひさしきゆて
わが移るもまゝの酒となごらのこゝろ
くはき事（）常夏の詩なり

留春^{トミ}と^{トミヲ}駐去歸人^テ年^{セキ}老^{ナリ}白^{ハク}
去^シ紙^シ入^リと^トた^タれ

しこゝろとわかれりともうとまの海り
れ泣い人の心う寂寥とくさうきき
竹院君閑情永日菰亭我解道殘春白
雲のころとわかれ竹院又此とわけて
よ長き月夜くじけ菰亭よこころは
急いで暮成ゆもくじけわらや

留雲不用關城固クワシ 荻落隨風鳥入雲ハタキ 在列

春風や　んてそじろは雲のふちも
霞とて遠くしら　と花の風よきこひ
く　ひも　雲あり　花よ　ほり　泣こひ
く　あり　ふると　なり

春宵一尅價千金　二月あゝとあ人妻河へ
てゐるりとあ・い・じなまは妻のあ一刻あ
まゝいふ金なるといふ

九州大學圖書印

